初期近代英詩における錬金術（前編）

松本　舞*

Mai MATSUMOTO

Alchemy in Early Modern England, Part 1

要　　旨

本論では、まず、初期近代の英国詩人たちの表現を、錬金術の理論と照合させながら確認していく。錬金術には、卑金属を金に変える、実践的錬金術のほかに、不老不死の薬を得ようとする、精神的錬金術があり、両方の錬金術が文学作品の中で描かれている。錬金術師は一種の詐欺師であると、皮肉を込められて描かれることが多いが、錬金術によって取り出される第五元素の効果は、1650年代の錬金術復興運動の時期を経て、変化していく。さらに本論では、死からの復活を可能にするものとして錬金術が描かれていることに注目する。後編では、終末思想と錬金術の関係を明らかにしながら、ヘンリー・ヴォーンの詩の中の実践的錬金術の描写を清教徒の「新たなる光」（'New Light'）の概念に対する批判の視点から見ていく。

【キーワード：初期近代英詩，錬金術，第五元素，賢者の石，復活】

1．序

ヘンリー・ヴォーン（Henry Vaughan, 1621-1695）の『火花散る火打石』（*Silex Scintillans*, 1650）の冒頭には、図1のエンブレムとともに「献身」（'The Dedication'）と題された詩が付されている。

My God, thou that didst dye for me,
These thy deaths fruits I offer thee.
Death that to me was life, and light
But darke, and deep pangs to thy sight.
Some drops of thy all-quickning blood
Fell on my heart, those made it bud
And put forth thus, though Lord, before
The ground was curst, and void of store.
（Henry Vaughan, 'The Dedication', ll.1-8）[1]

ヴォーンは、「キリストの死」が、自らにとっては、「命であり光である」と述べる一方で、キリストの視界においては「暗く、深い激痛」であることを、神に叫んでいる。更に、自身の石のような心の上に、「すべてに命を与える血」が落ちたことを述べる。ここでの'quicken'という語は、一義的には「命を与える」もしくは「孵化する」の意であるが、ヘルメス思想の用語でもある。[2]

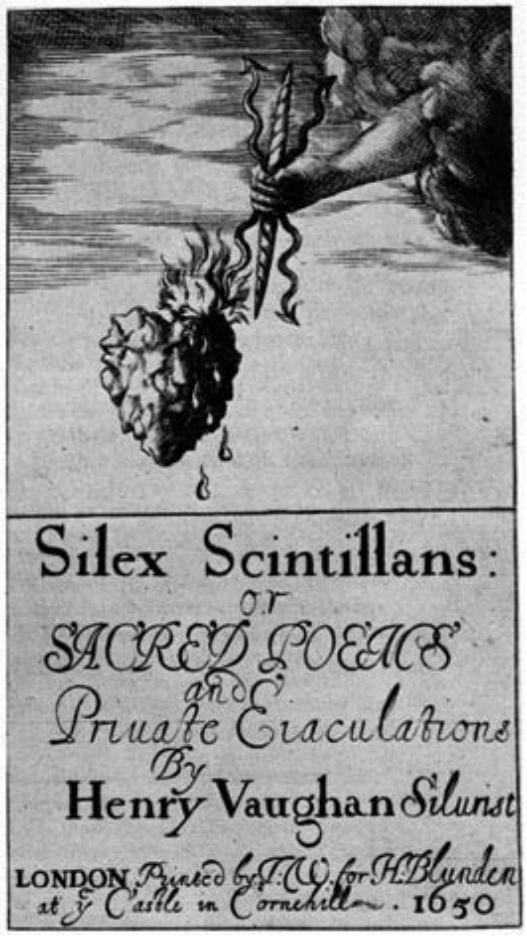

図1

*　島根大学教育学部言語文化教育講座

神に対して詩を捧げることを冒頭で示すことは宗教詩の詩集の伝統であり、ヴォーンが師と仰いだ、ジョージ・ハーバート（George Herbert, 1593-1633）は、詩集『神殿』（*The Temple*, 1633）の冒頭で、同じく「献身」（‘The Dedication’）と題し、次のような詩を付している。

Lord, my first fruits present themselves to thee;
Yet not mine neither：for from thee they came,
And make us strive, who shall sing best thy name.
Turn their eyes hither, who shall make a gain :
Theirs, who shall hurt themselves or me, refrain. (ll.1-5)

自身が生み出した詩群を「私の最初の実り」（‘my first fruits’）と表し、それを神に捧げ、神の名を称えると言うハーバートと同様に、ヴォーンはキリストの「死の実り」（‘deaths fruit’） を捧げると主張する。両者の表現を比較すると、ヴォーンの表現は、キリストの死によって、「すべてを孵化させる血」（‘all-quickning blood’）を得ることに焦点が当てられている。

『火花散る火打石』（*Silex Scintillans*）という題名、また、図1のエンブレムは何を意味するのだろうか。このエンブレムは、神の手が握る雷に打たれ、血と涙を流す、罪深き詩人の心を表すと考えられてきた。[3] ‘*silex*’ とはラテン語で「火打ち石」を意味し、錬金術に必要な第一資料、即ち「賢者の石」のことである。[4] これらのことを合わせて考えると、このエンブレムは、命が与えられる状態や天地創造を意味するだけではなく、錬金術に準じたものであると考えることができる。

また、エンブレムに付された詩は、ヘンリーの双子の弟であり、錬金術師であったトマス・ヴォーン（Thomas Vaughan, 1621-1666）が書いた『アンソロポソフィア・テオマギア』（*Anthroposohia Theomagica*）の中に掲載された、以下の詩と類似性を見出すことが可能である。

Lord God! This was a stone,
as hard as any One
Thy Laws in Nature fram’d :
’Tis now a springing Well,
and many Drops can tell,
Since it by Art was tam’d.

My God! my Heart is so,
’tis all of Frint, and no
Extracted of Tears will yeeld.
Dissolve it with thy Fire,
That something may aspire,
And grow up in my Field. [5]

この論文の中で、トマスは、神が人間を土くれから創造した、天地創造の記述を踏まえ、神が人間の魂の中に神の霊を注ぎいれてくれたがために、人間の魂は神聖な超自然的なものであるとする。そして魂それ自体が神の火花であるともいえる。そしてトマスは、「生命なき石から賢者の石に変容せよ」とも説いている。

ヘンリー・ヴォーンのエンブレムが錬金術の思想に準じたものである。それは何を意味しているのだろうか。注目すべきことに、『火花散る火打石』のエンブレム、及びその序文は1655年版では消失しており、その理由はまだ明らかにされていない。そこで、本論では、まず、初期近代の英国詩人たちの表現を、パラケルススをはじめとする錬金術の理論と照合させながら、錬金術の定義、錬金術師に対する諷刺を再確認し、16、17世紀英詩における第五元素がどのような変遷を辿っていったか、見ていくことにしたい。

2．錬金術の定義と種類

16、17世紀において、錬金術師たちが基本としたマニュアルは、ロジャー・ベーコン（Roger Bacon, c.1220- c. 1292）が著した、『錬金術の鏡』（*The Mirror of Alchemy*）である。この文献は、1200年代にラテン語で書かれ、1597年にロンドンで英訳版が出版されている。エリザベス朝時代の錬金術師たちはこの文献に示された錬金術の理論を基に、錬金術の実験を行っていたと考えられている。錬金術は、思弁的なものと実践的なものの二種類に分類された。また、錬金術は自然を模倣する試みから始まり、四元素のバランスを整えれば「賢者の石」、即ちエリクシルが得られると考えられていた。[6]

また、16-17世紀の英国では、ヘルメス学派の流れをくむ、パラケルスス（Paracelsus, 1493-1541）の論文が英訳、出版された。この動きは、イギリス国内における科学の原点となる、王立学士院設立の発端となる動向で、「錬金術復興運動」（‘alchemical renaissance’）と位置付けられている。[7] フランシス・イエイツ （Frances Yates）の著書『薔薇十字の覚醒』（*The Roscicrucian Enlightment*）の指摘によれば、錬金術復興運動の中心人物となったのは、トマス・ヴォーンである。トマス・ヴォーンは、1652年に『薔薇十字宣言』（*The Fame and Confession of the Fraternity of R: C: of Rosie Cross*）を初めて英訳し、出版した。トマスの英訳は、1400-1500年代に東欧諸国に影響を与えた錬金術の思想をイングランドにももたらすものとして示されている （pp. 255-6）。イエイツの著書の中では言及されていないが、錬金術師としてのトマス・ヴォーンは、イージニウス・フィラレティス（Eirenaeus Philalethes）のペンネームで『錬金術の真髄』（*The Marrow Of Alchemy*） と題した著書を1655年に発表している。[8]

黄金生成を目的とする錬金術は、時に、神の力と重ねられた。例えば、ジョージ・ハーバート（George Herbert, 1593-1633）は「エリクシル」（‘The Elixir’）と題された詩の中で、神の力を錬金術のイメージで描写する。ハーバートは、全ての中に神を見出す技を知ろうと試み、次のように言う。

Teach me, my God and king,
In all things thee to see,
And what I do in anything,
To do it as for thee[.]
……
All may of thee partake :
Nothing can be so mean,
Which with his tincture (for thy sake)
Will not grow bright and clean.

A servant with this clause
Makes drudgery divine :
Who sweeps a room, as for thy laws,
Makes that and th' action fine.

This is the famous stone
That turneth all to gold :
For that which God doth touch and own
Cannot for less be told. (ll. 1-4, ll. 13-24)

ここでは、すべての卑しきものは、神のために行われれば、神聖なものになることが、錬金術のイメージを伴って描かれている。例えば、「召使い」の「床をはく」ような仕事であっても、それが神のための行為であれば、「神聖な」ものへと変貌する。この力が錬金術でいうところの「エリクシル」即ち「賢者の石」の力に喩えられている。神の絶対的な力、神に対する信仰心も、一種の錬金術として捉えられている。

すべてを黄金へと変貌させる錬金術の力は、政権者を称える際に用いられることがあった。エイブラハム・カウリー（Abraham Cowley, 1618-1667）は、チャールズ一世の即位の際に、次のような詩を書いている。

Where, dreaming Chymics, is your pain and cost?
How is your oil, how is your labour lost?
Our Charles, blest alchemist (though strange,
Believe it, future times), did change
The iron age old
Into an age of gold. [9]

カウリーは、チャールズ一世のことを「祝福された錬金術師」（'blest alchemist'）とよび、「古き鉄の時代」を「黄金時代にすることができた」と賛美している。ここでカウリーは、「奇妙ではあるが」（'though strange'）という句を挿入し、チャールズ一世統治下の「鉄の時代」も、「黄金時代」に回帰できるであろうことを、錬金術のイメージを用いながら、やや皮肉を込めて描いてている。

一方、黄金を生成する過程で「エリクシル」もしくは「賢者の石」と呼ばれる秘薬を取り出し、全ての病を治癒しようという試みも行われた。ヘンリー・ヴォーンはヘルメス学の流れをくむ、ヘンリー・ノリウス（Heinrich Nollius）の『ヘルメス医学書』（*Hermetick Phyisick*）を英訳し、『火花散る火打石』の第二版と同じ、1655年に出版している。[10] この書物の中で、ノリウスは「賢者の石」を医学の用語と定義し、次のように述べている。

Medicine or Physick is an Art, laying down in certain Rules or Precepts, the right way of preserving and restoring the health of Man-kind. The word Medicine, hath a manifold sense. First, It is taken for some receipt or medicament. So the Philosophicall Stone is termed Medicine. The Lord hath created Medicines out of the Earth, and the wise man will not abhor them. (p.1)

錬金術によって探求される「賢者の石」（'Philosophers Stone'）もしくは「第五元素」（'Quintessence'）の効用は、パラケルススの論文の中で次のように説明されている。

Philosophers stone […] expels […] so many wonderful Diseases […] Philosophers Stone doth purge the whole Human Body, and cleanse it from all its defilements[.]
The Quintessence therefore, is a certain matter Corporally extracted out of all the things, which Nature hath produced; and also out of every thing that hath a life in its self, and is separated from all impurities and Mortality, is most subtilly mundified[.][11]

「賢者の石」は多くの病を治療し、さらに、人間の体すべてを浄化させる。パラケルススは、この秘薬が特に、「浄化をする」（'purge'）効果や、汚れを「洗浄する」（'mundify'）効果があることを強調している。パラケルススの理論は、賢者の石の医学作用を再認識させるものとなっている。

16、17世紀の詩人たちは、黄金練成のための実践的錬金術、不老不死の薬を得るための精神的錬金術の両方の機能を認識し、詩作品に取り入れている。以下の論では、錬金術師たちがどのように描かれているか、検証を試みる。

3.『錬金術師』に対する諷刺

錬金術師たちが「賢者の石」や「エリクシル」を追い求める様子は滑稽に描かれることが多い。例えば、ジョン・ミルトン（John Milton, 1608-1674）の叙事詩『失楽園』（*Paradise Lost*, 1667）の第三巻では、「太陽」が「大錬金術師」（'Th'Arch-chimic Sun'）と表され、そこに「サタン」（'Satan'）がやってくる。サタンは、太陽の表面の石を「言葉に表しがたいほどに輝かしい」と感じ、「地上のものとは比べ物にならない」ような、「金属あるいは石」について次のように思いを巡らす。

If stone, Carbuncle most or Chrysolite,
Rubie or Topaz, to the Twelve that shon

In *Aarons* Brest-plate, and a stone besides
Imagind rather oft then elsewhere seen,
That stone, or like to that which here below
Philosophers in vain so long have sought,
In vain, though by thir powerful Art they binde
Volatil Hermes, and call up unbound
In various shapes old Proteus from the Sea,
Draind through a Limbec to his Native forme.
What wonder then if fields and region here
Breathe forth Elixir pure, and Rivers run
Potable Gold, when with one vertuous touch
Th' Arch-chimic Sun so farr from us remote
Produces with Terrestrial Humor mixt
Here in the dark so many precious things
Of colour glorious and effect so rare?
（Book 3, ll. 596-622）

サタンが眼にした石は、地上にて、「虚しくも」（'in vain'）錬金術師たちが追い求めている「あの石」そのものであり、真の錬金術師である太陽は「純粋なエリクシル」を生み出している。ここで エリクシルが「純粋な」（'pure'）という語で形容されているのは、太陽という錬金術師が生み出しているエリクシルの純度が高いことを示す。逆に言えば、サタンが見た、地上の錬金術師たちが作り出しているエリクシルには混ざりものが多いこと、さらには、地上にはエリクシルすら存在しないことを暗に示している。

ミルトンが「虚しくも」という表現を繰り返し使っていることから分かるように、錬金術師の実験が成功することは稀であった。偽の錬金術師たちの愚行は、ジョン・ダン（John Donne, 1572-1631）の詩の中でも「錬金術師がいまだにエリクシルを掘り当てたことはない」（'no chemic yet th' elixir got', 'Love's Alchemy', l.7）と描かれる。また、錬金術師たちの盲目さは、「錬金術師がたびたび贋金をつくるように/自らをおとしめることが自己愛に導く」（'as oft alchemists do coiners prove / So may a self-despising get self love', 'The Cross', ll.37-8 ）ことの喩えになっている。錬金術師は、黄金を取り出せることを、「自慢したり、誓ったり、いばったり」しているが、彼らの為す技は、一種の猿真にすぎないことを、トマス・ヴォーンは次のように描いている。

What though some varlets of this Art [Alchemy] do boast,
Who know therin no more then doth Ape?
They swear, they swagger, as they rul'd the roast,
Alluring such who after wealth do gape,
To trust their oaths and lies, and do disburse
Upon their skill what ere they have in purse.

And when from them their moneys they have
In fine it proves their Art but a cheat,
For what they vaunted, wretches! They have not
Their Skill is founded upon errors Seat;
Then are their-greedy Creditors asham'd
And curse their craft, yet both are to be blam'd. [12]

また、錬金術が一種の社会風刺として描かれている例として、ベン・ジョンソン （Ben Jonson, 1572-1637）の戯曲『錬金術師』（*The Alchemist*）が挙げられる。ジョンソンは、劇中の登場人物サーリー（Surly）に次のように言わせている。

What else are all your terms,
Whereon no one of your writers 'grees with other?
Of your elixir, your Iac virgins,
Your stone, your med' cine, and your Chrysosperme
Your sal, your sulpher and your mercury,
Your oil of height, your tree of life, your blood,
Your marchesite, ……
（Act II, Scene 3, ll.184-190）

ここでは、錬金術によって得られる秘薬が「エリクシル」「石」「薬」「水銀」など、様々な呼び名を持つことが示されている。ジョンソンの描写は、錬金術師たちの実験が成功することは稀であることを揶揄するだけでなく、錬金術師たちが実験を行うのに必要な材料が、戯曲を観る人々にも既に認識されていたことを浮き彫りにしている。更に、ベン・ジョンソンは、サーリー（Surly）をして次のように語らしめている。

Rather than I'll be brayed, sir I believe
That alchemy is a pretty kind of game,
Somewhat like tricks o'the cards, to cheat a man
With charming.
（Act II, Scene 3, ll. 179-182）

「錬金術」とは、人を欺くための一種のゲームにすぎない。それに踊らされる人々は一種の「まじない」（'charming'）によって眼をくらまされているだけなのである。

4.「第五元素」の変遷

上記では、錬金術師たちの愚行について見てきたが、錬金術によって取り出される「第五元素」（'Quintessence'）そのものの機能には、多様な効果が期待されていた。ここでは「第五元素」がどのように変化をしていったか、16、17世紀の詩人たちの表現を見ていくことにしたい。

16世紀の詩人たちは、「第五元素」（'quintessence'）を、世の中を構成する物質である、火・空気・水・土の四元を超越するものとして描いた。例えば、フルク・グレヴィル（Fulke Greville, 1554-1628）は、ソネット詩集『シーリカ』（*Caelica*, 1628）の87番の中で、ある種の錯乱した恋愛感情を「情熱の第五元素」（'A quintessence of passions', l. 8） と表現している。さらに、マクロコスモスのレベルにおいては、天球の音楽もまた、第五元素

として捉えられた。たとえば、クリストファー・ハ―ヴェイ（Christopher Harvey, 1597-1663）は、「教会の祭典」（‘Church Festivals’）と題された詩のなかで、「洗練されたエリクシル」（‘refined elixirs’, l. 17）と「星からの抽出物」（‘quintessential extracts of the stars’, l. 18）を並列関係に置いている。第五元素としての天球の音楽は、‘quintessence’の一種として認識され、太陽や星などは、天がなし得る錬金術として描かれるようになった。天球の音楽が第五元素と位置付けられるのはロバート・フラッドやヤコブ・ベーメのヘルメス思想を反映している。

人間というミクロコスモスがなし得る錬金術として、涙の抽出がある。王党派の立場を保持し、王政復古期の戯曲の先駆けとなった、サー・ウィリアム・ダヴェナント（Sir William Davenant,1608-68）は戯曲『ゴンディバート』（*Gondibert*, 1651 ）の中で、愛のエリクシルが、触れるだけで、力強い黄金へと自体を変化させる （‘Elixir-Love turns all / To pow’full Gold, where it does only touch.’, The Third Book, Canto the Fifth, Stanza 27, ll.3-4）ことを描き、更に、「眼から抽出されたもの」としての「涙」を「愛のエリクシル」と並行関係に置いている。

[. . .] now his Heart（extracted through his Eyes
In Love’s Elixir, Tears）does soon subdue
Old *Astragon*; whose pitie, though made wise
With-Love’s false Essences, like these as true.
（The Second Book, Canto the Seventh, 87, ll. 1-4）

涙は、第五元素であるエリクシルとして認識されるようになったのである。さらに言えば、涙という抽出液が、癒しや浄化の作用をもつ秘薬として描かれるようになった。この効果は、ジョン・ダンの以下の描写にみてとることができるだろう。ダンはパラケルスス医学における第五元素について触れながら、愛と薬の作用を次のように説く。

[. . .] if this medicine, love, which cures all sorrow
With more, not only be no quintessence,
But mix’d of all stuffs, vexing soul, or sense,
And of the sun his active vigour borrow,
Love’s not so pure, and abstract as they use
To say [.] (ll.7-12）

ダンが実際に手にいれている「愛」という「薬」は、悲しみを癒そうと試みると、悲しみをさらに　増し加えるものであり、とても「第五元素」であるとは思えない、とダンは言う。逆説的にいえば、もし仮に、愛が真の「第五元素」そのものであったのならば、それは癒しの効果を持ちうるという理論が、そこには隠されている。換言すれば、愛によって抽出される涙が薬として機能するのは、それが、錬金術によって取り出される、純なる第五元素であるためである。更に、ダンは、「一年で最も短い聖ルーシーの日の夜想曲」（‘A Nocturnal upon St. Lucy’s Day being the Shortest Day’）と題された詩の中で、「新しい錬金術」を次のように見出している。

[. . .] I am every dead thing,
In whom Love wrought new alchemy.
For his art did express
A quintessence even from nothingness,
From dull privations, and lean emptiness ;
He ruined me, and I am re-begot
Of absence, darkness, death - things which are not.

All others, from all things, draw all that’s good -
Life, soul, form, spirit- whence they being have ;
I, by Love's limbec, am the grave
Of all：that's nothing. Oft a flood
Have we two wept, and so
Drowned the whole world, us two ; oft did we grow,
To be two Chaoses, when we did show
Care to aught else ; and often absences
Withdrew our souls, and made us carcasses.

But I am by her death（which word wrongs her）
Of the first thing nothing the elixir grown.（ll.12-29）

「愛」（‘Love’）は、「絶望感」や「虚無」をさらなる「死」へと導く。ここでダンはさらなる死を得ることを「新しい錬金術」と名付けている。ここでの「エリクシル」は、恋人の死により近付く効果を持っている。

16、17世紀にかけは、「第五元素」の効果そのものが変化していった。そして、ダンの詩では、死や復活にまつわるものとして、「エリクシル」が描かれている。精神的錬金術によって取り出される第五元素は、死からの復活、さらに言えば、最後の審判での復活を可能にするための秘薬としてのニュアンスが加わったのである。これには、賢者の石とキリストが同一視されるようになった背景が関係している。

5．復活と錬金術

ダンの詩の中にも、錬金術における「第五元素」によって、死からの復活を可能にする様子も描いているものがある。例えば、「復活、未完」（‘Resurrection, imperfect’）と題された詩の中で、キリストの復活は次のように描かれる。

Whose [Christ’s] body, having walked on earth, and now
Hasting to heaven, would that he might allow
Himself unto all stations, and fill all
For these three days become a mineral.
He was all gold when He lay down, but rose
All tincture[.]（ll. 9-14）

ここでは、キリストが死に、復活するまでの様子が、「三日間、地下の鉱石となった」と描かれている。「三日間」という期間は、キリストの死から復活までの期間ではあるが、この期間は、錬金術過程において、練成に必要な期間でもある。ここで、ダンは、錬金術のマニュアルに忠実に従っていることが分かる。ロビン・ロビンス（Robin Robbins）はこの描写について、M. Sedzivocz の *Novum Lumen Alchymiae*（1615）をJ. French が英訳した、*New Light of Alchemie*（1650）から引用し「賢者の石、すなわちティンクチャーは、もっとも高い純度の黄金である」（'The philosopher's stone or tincture is nothing but gold digested to the highest degree.', p. 28）と注釈を付けている（p.518）。

ダンがキリストと賢者の石を重ねているのは、パラケルススの理論の中で、賢者の石とキリストが重ねられていることに由来する。パラケルススはキリストが「イエス・キリストは唯一の、そしてただ一人の、人類を罪の精神的らい病から救出できる、唯一の存在である」（'Christ Jesus is the only and alone Savior and Mediator, in whom, and by whom, we are [...] purified from the Spiritual Leprosy of sin.', Paracelsus, 1661, p. 179）と説き、さらに、キリストはこの世の「賢者の石である」と唱えている。

> Corner-stone Jesus Christ may be compared with the terrene Philosophical Stone of the wise men, the matter and preparation whereof is (as we have heard) a notable type and lively counterpoise (as'twere) [and resemblance] of the divine assumption of human flesh in Christ. [13]

「復活、未完」では「キリストは、横わった時に、すでに黄金であった」（'He was all gold when He lay down'）と述べているがダンが、なぜ、わざわざ「黄金」について言及しているのか、考察してみよう。ロビンスは、ヘレン・ガードナー（Helen Gardner）の指摘について言及し、通常の人間の死体が横たわる際には、たとえば、ベッドフォード伯爵夫人への哀歌にあるように、「黄金になるために、墓に横たわる」となっていることを指摘している（p.518）。本来ならば、土である人間の肉体が、土の中に横たわり、練成を受けることで、黄金になる、つまり、復活するという、錬金術的な比喩表現である。しかし、ダンは、「キリストは、横たわった時に、すでに金であった」ことを強調している。これは、錬金術でいうところの「第一資料」が「黄金」（'gold'）であることを示す。

ではなぜ、ダンは「復活、未完」の詩の中で、キリストが復活することを、「ティンクチャー」（'tincture'）となって復活すると描いたのだろうか。その答えは次のパラケルススの理論の中に隠されている。パラケルススは、錬金術で取り出される「秘薬」を段階にわけており、以下のように説明している。

> [...] the first Arcanum is the *Prima Materia*; the second is the *Stone of the Philosophers*; the third is a *Mercurius vitae*, and the forth is the Tincture. [14]

「ティンクチャー」（'tincture'）とは、錬金術から取り出される秘薬の最終段階であり、人間の病そのほかを取り除き、すべての肉体を純な、崇高な、そして永遠のものにすると考えられていた。以下の理論は、その絶対的な薬効を示したものである。

> Tincture [...] takes away from him [Man] his Corruption, and Impediments, and transmutes all his parts into the heighst Puritie, Nobility, and permanenciet. [15]

ダンは、あえて、この「ティンクチャー」（'tincture'）という単語を用いて、復活したキリストの純度の高さを示していると考えることができる。

ダンのこの意図は、「マーカム卿夫人の死を悼む哀歌」（'An Elegy upon the Death of the Lady Markham'）と題された詩の中の錬金術の描写と比較することで、より明らかになる。

> [...] as the tide doth wash the slimy beach
> And leaves embroidered works upon her sand,
> So is her flesh refined by Death's cold hand.
> As men of china after'n age's stay
> Do take up porcelain where they buried clay,
> So at this grave, her limbeck, which refines
> The diamonds, rubies, sapphires, pearls, and mines
> Of which this flesh was, her soul shall inspire
> Flesh of such stuff as God, when his last fire
> Annuals this world, to recompense it, shall
> Make, and name then th'elixir of this all.（ll. 18-28）

ここでは、マーカム夫人の、墓に横たわった時の身体が、宝石でできている、という表現で、彼女が称えられている。しかし、確かに、24行目の「鉱石」（'mines'）には、金鉱石のニュアンスがあるが、18行目から22行目までの比喩表現で、マーカム夫人の肉体は、「汚れた海岸」（'the slimy beach'）や「粘土」（'clay'）と並行関係に置かれてさえいる。それに比べて、「復活、未完」では、「第一資料」であるキリストの体が、すでに、はっきりと、「黄金」（'gold'）であったことが強調されている。さらに、興味深いことに、キリストもマーカム夫人の墓も共に、一種の「蒸留器」（'limbeck'）になっているが、キリストが「ティンクチャー」（'tincture'）として、再生する一方、夫人は「エリクシル」（'elixir'）として再生する。パラケルススの段階に準じると、人間である夫人が再生しても、賢者の石の最高段階である「ティンクチャー」（'tincture'）にはなりえない、というダンの意図も読み取ることができる。ダンが描く、キリストの復活の錬金術は、「三日間」という時間において、そして、「ティンクチャー」（'tincture'）として再生することに焦点が当てられている。そして、墓という容器の中で、また土の中から生じる熱による錬金術過程によって、肉体を浄化させるものでもある。

6．結

本論では、初期近代英詩における錬金術の描写を、錬金術師たちへの皮肉や、第五元素の変遷などを中心にみてきた。また、17世紀には、第五元素の純度が四段階に分けられ、ジョン・ダンは、その理論を用いながら、キリストの復活を描いていることを確認した。マーカム夫人は「神の最後の火がこの世を/ 滅ぼすとき」（‘God, when his last fire / Annuals this world’, ll. 26-7）に蘇る、とダンは言っているが、この表現は終末思想のイメージと重ねられている。この終末思想と錬金術の関係は、1650年以降、ヴォーンの時代になると、より密接な関係を持つようになる。敷衍すれば、キリストの再降臨を待ち望む、最後の審判の思想と、錬金術の理論が重ねられ、唱えられるようになったのである。後編では、終末思想と錬金術の関係を見ていくことにしたい。

注

下線部はすべて筆者による。また、本稿において、文献中のlong‘s’表記はすべて現代英語表記にて引用し、出版社不明の文献に関しては出版年のみを記載する。

[1] ヴォーンの詩は、Henry Vaughan, *Silex Scintillans*（London, 1650, 1655）を定本として用いる。また、注釈に関しては、これに加えて*The Works of Henry Vaughan*, ed. L. C. Martin, 2nd ed.（Oxford：Clarendon, 1957）、*The Complete Poems*,. ed. Alan Rudrum（Harmondsworth：Penguin, 1977）を参考にし、以下、それぞれ、*Works*、*CP*と記載する。

[2] Pettet, p.74 を参照。ヴォーンの詩におけるヘルメス主義の影響については、Hutchinson, pp. 141-155、Pettet, pp. 71-86、Davies, pp. 28-56参照。

[3] Martz（1964）, pp.5-7 を参照。図版解釈に関しては、Dickson, pp.124-9、Simmonds, p. 153、参照。また、*Silex Scintillans* の中ではこのエンブレムについての説明は試みられていないが、ヴォーンは、1654年に *The World Contemned by Eucherius, Bp of Lyons, And the Life of Paulinus, Bp of Nola* を出版した際、読者にあてた序 （‘To the Reader’）のなかで、「火打ち石」と錬金術に対して次のように述べている。

> Resolution, Reader, is the Sanctuary of Man, and Saint into smooth and ductible gold: [. . .] It is the *Philosophers secret fire*, stomack of the Osterich which digests Iron, and dissolves the hard flint into bloud and nautriment.（Works, p.217）

[4] Calhoun, p.156、Martz, pp.138-139を参照。

[5] Thomas Vaughan, *Anthroposohia Theomagica*, p.28 .トマス・ヴォーンとヘンリー・ヴォーンの関係については、Pettet, pp. 71-85, Itrat-Husain, pp.237-263を参照。

[6] Roberts, pp.36-37

[7] Debus, pp. 86-136を参照。デービスはこの著書の中で、パラケルススと科学の革命が密接に関わっていたこと、エリザベス朝におけるパラケルススの影響、ニュートンへとつながっていく科学革命の変遷などを論じている。

[8] この文献は散文ではなく、一連が6行、83連の韻文で書かれている。大英図書館に保存されている第一版には、最初の3頁に×印が書かれている。この×印については議論がなされていないが、錬金術復興運動が清教徒革命の混乱期に書かれたことと併せて考慮すると、政治的な意図を読み取ることができるかもしれない。

[9] カウリーの詩と錬金術の表現については、Maxwell-Stuart, p.142を参照。

[10] 医師としてのヴォーンの活動については、Hutchinson, pp.182-3を参照。

[11] Paracelsus, 1660, p. 64. 1660年に英訳が出版された、*Paracelsus: His Archidoxis: Comprised in Ten Books, Diselosing the Genuine way of making Quitesssence, Arcanums, Magesties, Elixirs, & c.* の中では、まず第一巻で、「ミクロコスモスにおける神秘」（‘of the mystery of the microcosme’）に加え、様々なものから薬を取り出す方法が説明され、第三巻では錬金術でいうところの「分離について」（‘Of the Seperation of the Elements’）述べられる。 第四巻では「第五元素について」（‘Of the Quintessence’, pp. 35-60）の論が展開されている。ここでは「第五元素」（‘Quintessence’）の浄化作用が論じられたうえで、「鉱物から取り出す第五元素」（‘Of the Extraction of the Quintessence out of Metals’, pp. 47-49）や「成長するものから取り出される第五元素」（‘Of the Extraction of the Quintessence out of Growing Things’, pp. 54-55）などの効用が示されている。

[12] *The Marrow of Alchemy* , Book One, Stanza 9-10.

[13] Paracelsus, 1660, p.176.

[14] Paracelsus, 1660, p. 63.

[15] Paracelsus, 1660, p. 64.

参考文献

Bacon, Roger. *The Mirror of Alchemy.* London, 1597.

Bright, Timothy. *A Treatise of Melancholy*. London, 1586.

Calhoun, Thomas O. *Henry Vaughan, the achievement of SilexScintillans*. New Jersey: Associated University Press,1981.

Casaubon, Meric. *A Treatise Concerning Enthusiasme*. London, 1655.

Davenant, William. *Gondibert: An Heroic Poem*. 1655.

Debus, Allan.G. *The English Paracelsians*. New York: Flanklin Watts, 1966

Dickson, D, R. *The Fountain of Living Waters*：*The Typology of the Waters of Life in Herbert, Vaughan, and Traherne*. Colombia：U of Missouri P, 1987.

Donne, John. *The Complete Poems of John Donne*. Ed. Robin Robins. Longman, 2008.

Durr, R. A. *On the Mystical Poetry of Henry Vaughan*.

Cambridge, Mass：Harvard U P, 1962.

Fowler, Alaster. *The New Oxford of Seventeenth Century Verse*. Oxford：OUP, 1991.

Greville,Fulke. *The Works in Verse and Prose Complete of the Right Honourable Fulke Greville*. Repeint. 1870.

Herbert, George. The Complete English Works. Ed. A. P. Slater. New York: Knopf, 1995.

Hill, Christopher. The World Turned Upside Down: Radical Ideas during the English Revolution. New York: Viking, 1972.

The Holy Bible: *Kings James Version*. Oxford, OUP, 1996.

Holmes, Elizabeth. *Henry Vaughan and the Hermetic Philosophy*. Oxford：Blackwell, 1932.

Hutchinson, F. E. Henry Vaughan. Oxford：Clarendon, 1947.

Husain, Itart. *The Mystical Element in the Metaphysical Poets of the Seventeenth Century*. London, 1948.

Jonson, Ben. *Ben Jonson's Plays and Masques*. London: Norton, 1979

Linden, S. J. *Darke Hierogliphicks*. Lexington: Kentucky UP, 1996.

—. *The Alchemy Reader*: *From Hermes Trismegistus to Isac Newton*. Cambridge: CUP, 2003.

—. *Mystical Metal of Gold*. New York: AMS, 2007.

Lurentius, Andreas. *A Discoverse of the Preservation of the Sight*: *of Melancholike Diseases of Rhuemes, and of Old Age*. Ed. Richard Svrphlet. London, 1599.

Martin, L.C. 'Henry Vaughan and the Theme of Infancy.' *Seventeenth Century Studies*. Ed. John Purves. Oxford; Oxford UP, 1938. 243-55.

Martz, Louise, L. *The Paradise Within*：*Studies in Vaughan, Trahere, and Milton*. New Heaven and London, 1964.

—. *The Poetry of Meditation*. London：Yale UP, 1965

Maxwell-Stuart. P.G. *The Chemical Choir*. London: Continuum , 2008

Milton, John. *Paradise Lost*. Ed. Alastair Fowler. London: Longman, 2006.

Nollius Heinrich. *Hermetical Physick*: *or, The Right Way to Preserve, and to Restore Health. Englished by Henry Uaughan, Gent*. London, 1655.

Paracelsus, Theophrastus. *Volumen Paramirum*. Basel. 1541.

---. *A Hundred and Fouretene Experiments and Cures*. London, 1596.

—. *The First* (*and Second*) *Part of the Key of Philosophie*. Translated by John Hester. London, 1596.

—. *The Secrets of Physick and Philosophy*. Translated by John Hester. London, 1633.

—. *The Occult Causes of Disease. Being a Compendium of the Teachings Laid Down in His "Volumen Paramirum"*. Translated by R. Turner. London, 1655

—. *Phirosophy to the Athenians*. Translated by H. Pinnel. London, 1657.

—. *Paracelsus his Auroa & Treasure of the Philosophers… Faithfully Englished And published by W.D.* London, 1659, 1674.

—. *Paracelsus His Archidoxes Comprised in Ten Books. Faithfully and Plainly Englished, and Published by J.H. Oxon*. London, 1660.

—. *The Hermetic and Alchemical Writings of Paracelsus*. Translated by A. E.Waite and edited by L.W. de Lurence. 2vols. Chicago：de Laurence, Scott & Co., 1910

—. *Volumen Medicinae Paramirum*. Translated by K. F. Leidecker. Balitomore: The Johns Hopkins, 1949.

Pettet, E. C. *Of Paradise and Light*. Cambridge: CUP, 1960.

Post, Jonathan. *The Unfolding Vision*. Princeton: Princeton UP, 1982.

Rattansi, P.M. 'Paracelsus and the Puritan Revolution' *Ambix Ⅱ*, 1963.

Rudrum, Alan. ' ''These fragments I have shored against my ruins": Henry Vaughan, Alchemical Philosophy, and the Great Rebelion' *Mystical Metal of Gold*：*Essays on Alchemy and Renaissance Culture*. Ed.Stanton J. Linden. Ed. Brooklyn：AMS, 2007.

Robert, Gareth. *The Mirror of Alchemy*. London: British Library, 1994.

Scot, Patrick. *The Tillage of Light, or a True Discoverie of the Philosophicall Elixir*. London, 1623.

Simmonds, J. D. *Masques of God*. Pittsburgh: U of Pittsburgh, 1972.

Vaughan, Henry. *A Sermon Preached*. London, 1644.

—. *Silex Scintillans*. London, 1650, 1655

—. *Mount of Olieves*：*Or Solitary Devotions. London, 1652*.

—. *The Works of Henry Vaughan*. 2 nd ed. Ed. L.C. Martin. Oxford：Clarendon Press, 1957.

---. *The Complete Poems*. Ed. Alan Rudrum. Harmondsworth：Penguin, 1977.

Vaughan,Thomas. *Anthroposohia Theomagica*. London,1650.

—. *Magia Admica*. London, 1651.

—. *The Fame and Confession of the Fraternity of R*：*C*. London, 1651.

—. *The Marrow of Alchemy*. London, 1654, 1655.

West, Phillip. *Henry Vaughan's Silex Scintillans*：*Scripture Uses*. Oxford：OUP, 2001.

Yates, Francies. *The Rosicruician Enlightment*. London: Routledge, 2001.